

1 要因分散分析・ 相関係数・偏相関係数

サンプル論文 3

介護意識の形成

— 高齢者との同居経験と高齢者観との関連から —

問題・目的部分の要約

高齢化社会の到来を受け、誰が介護を引き受けるかという問題は、政策というマクロな視点においても、家族内役割分担というミクロな視点においても、非常に重要で、喫緊の課題といえる。この研究では、介護に積極的に参加しようとする介護意識の形成について検討する。具体的には、その形成に大きく影響していると考えられる、高齢者との同居経験（期間）、またさまざまな経験からの影響を受けて形成されると考えられる高齢者観との関連を探る。

方 法

調査時期・対象

2017年11月に、首都圏に位置する大学で、経済学部および経営学部生が受講する社会福祉関係の授業3クラスにおいて、調査概要を説明した後、協力に同意した学生を対象に調査を実施した。

調査内容

調査内容は、性別と年齢の他、次の3点であった。

高齢者との同居経験 同居（二世帯住宅や隣地に居住している場合も同居とみなす）経験のある高齢者の人数とその期間をたずねた。高齢者については年齢では特定せず、「あなたのおじいさんやおばあさん、もしくはそれ以上の年齢の人」と教示し、自分との関係と、自分が何歳の時から何歳の時まで同居したのかを所定の欄に記入するように求めた。1年未満の際は、たとえば「10歳の時から10歳の時まで」

との記入を求めた。なお、同居していたものの、幼少期のことで記憶にない時期も存在すると考えられるため、最も古いであろう記憶のある年齢を同居のスタートとするように求めた。

介護意識 安木（2009）は、Johnson & McArdle（1996）の示した理論をもとに、高齢者介護全般に関する意識を測定する高齢者介護性測定尺度を作成している。この尺度は4つの下位尺度から構成され、毛利（2011）や持田・中村・秋山（2013）などでも、その因子構造や信頼性が確認されている。本研究ではこの尺度から、介護への積極性をあらわす「介護積極性」因子を構成する「機会があれば、ぜひ介護をしてみたい」「高齢者の介護は、自分が成長できるきっかけになると思う」など6項目を利用した。回答は、安木（2009）にならい、「まったくそう思わない」から「とてもそう思う」までの5件法を採用した。

高齢者観 高藤（2000, 2001）が青少年を対象に作成した高齢者観尺度を用いた。この尺度は23項目から構成されるものであり、3つの下位尺度から構成される。それぞれの下位尺度は、「高齢者には若い者が持たない知恵がある」など、高齢者は有能であり、社会的に有用な存在であると認識する傾向を示す「ポジティブな高齢者観」（9項目）、「高齢者は、守られるべき社会的弱者だ」など弱者であるという認識の傾向を示す「ネガティブな高齢者観」（8項目）、および「加齢に伴う心身の変化についてもっと知りたい（逆転項目）」などの項目から構成される「無関心」（6項目）である。この尺度は平田（2006）など多くの研究で用いられており、その信頼性、妥当性が繰り返し検討されている尺度である。なお回答には高藤（2001）同様、「そう思わない」から「非常にそう思う」の5件法を用いた。

結果と考察

本調査の回答は395名から得られた。平均年齢は19.87歳（SDは1.13）であったが、18歳から57歳にわたっていた。そこで、分析の対象となる年齢を18歳から24歳まで（383名）に限定することにした。このうち、高齢者との同居経験がある者は223名（男100名、女123名）であった。以下ではこの223名を対象として分析を行う。

同居した人数は、1人が102名（男44名、女58名）、2人が95名（男40名、女55名）、3人が24名（男15名、女9名）、4人以上が2名（男1名、女1名）であった。期間については、同居していた高齢者の人数に関わらず、同居していた期間を1年未満の場合を1、1年以上2年未満の場合を2というように数値化した。その平均、標準偏差をTable 1に示す。

次に、本研究で利用した4つの尺度について、その信頼性と基礎統計量を算出した。各尺度については、項目平均点を尺度得点としている。その結果をTable 1に示す。なお α 係数を用いて信頼性を検討したところ、Table 1に示されているような値が得られた。介護意識や無関心はやや低めであるが、先行研究（安木, 2009；高藤, 2001 など）で見出されている α 係数の値とほぼ同等である。そのため、利用に問題はないと判断した。

Table 1
各測度の平均値, *SD* および α 係数

	平均	<i>SD</i>	α
同居期間	12.20	4.18	—
介護意識	3.74	0.91	.71
ポジティブな高齢者観	2.84	0.82	.82
ネガティブな高齢者観	2.88	0.87	.78
無関心	3.57	0.87	.70

高齢者との同居期間の影響についての検討に先立ち、同居人数が介護意識や高齢者観におよぼす影響を検討する。そのため、介護意識および高齢者観の尺度得点について同居人数を要因とする 1 要因分散分析を行った。なお、同居人数が 4 人以上という回答者は少数であったため、3 名以上をひとつのカテゴリとしてあつかった。その結果を Table 2 に示す。

Table 2
同居人数と介護意識・高齢者観との関連

	1 名 (<i>n</i> =102)		2 名 (<i>n</i> =95)		3 名以上 (<i>n</i> =26)		<i>F</i>	多重比較	η^2
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>			
介護意識	3.66	0.99	3.72	0.86	4.11	0.66	2.58		0.02
ポジティブな高齢者観	2.77	0.78	2.78	0.79	3.38	0.93	6.56 **	1<3, 2<3	0.06
ネガティブな高齢者観	3.04	0.84	2.71	0.88	2.87	0.88	3.60 *	1>2	0.03
無関心	3.64	0.89	3.58	0.89	3.28	0.69	1.80		0.02

** $p<.01$, * $p<.05$; 自由度はいずれも (2, 222)

分散分析の結果、介護意識と無関心においては有意な差は認められなかったが、ポジティブな高齢者観で 1%水準の有意差が、ネガティブな高齢者観で 5%水準の有意差が認められた。Tukey 法による多重比較 (5%水準) を行った結果、ポジティブな高齢者観は、3 名以上群の平均値が 1 名群および 2 名群より有意に高いことが明らかになった。ネガティブな高齢者観では、1 名群が 2 名群よりも有意に高いことが明らかになった。効果量 η^2 を算出したところ、ポジティブな高齢者観では中程度の効果量が認められたが、他の変数では小さい値といってよいだろう。この結果より、同居人数はポジティブな高齢者観へはある程度の影響があるといえるが、他の変数への影響は小さいと考えられる。

次に、同居期間、介護意識、ポジティブな高齢者観、ネガティブな高齢者観、無関心の各変数間の相関係数を算出した。さらに、これらの変数は相互に関連しあっていることが想定されるため、求められる 2 変数以外の変数の影響をコントロールした偏相関係数も算出した。その結果を Table 3 に示す。

Table 3 より、相関係数においては、すべての変数間において弱いながらも有意な相関が認められている。介護意識を中心に考察すると、これは同居期間、ポジティブな高齢者観との正の相関、ネガティブな高齢者観、無関心と負の相関が認められた。また、その値は正負の違いはあるものの、ほぼ同程度の値である。偏相関係数からは、介護意識はポジティブな高齢者観、ネガティブな高齢者観との関連が

Table 3
変数間の相関、偏相関係数

	同居期間	介護意識	ポジティブな 高齢者観	ネガティブな 高齢者観	無関心
同居期間		.16 *	.09	-.22 **	-.16 *
介護意識	.31 **		.22 **	-.21 **	-.14 *
ポジティブな高齢者観	.24 **	.34 **		-.06	-.21 **
ネガティブな高齢者観	-.33 **	-.32 **	-.21 **		.06
無関心	-.28 **	-.29 **	-.32 **	.20 **	

相関係数（左下）、偏相関係数（右上）

相対的に強いことが示唆される。これらの結果から、介護意識は同居期間やすべての高齢者観と関連しているが、中でもポジティブ、ネガティブといった高齢者イメージとの関連が強めであると指摘できよう。さらに偏相関係数ではポジティブな高齢者観は無関心と、ネガティブな高齢者観は同居期間と有意に関連することが示された。

同居期間に注目すると、相関係数では他のすべての変数と有意な関連が認められた。しかしながら、偏相関係数を用いた検討ではネガティブな高齢者観との関連が相対的に強く、ポジティブな高齢者観との関連は有意とはいえないことが明らかになった。

（以下、略）